

開 会 の 辞

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長
竹谷 裕之

こんにちは。開会にあたりまして、センターを代表して簡単にご挨拶を申し上げます。

先程、司会の北川教授も言いましたが、私どもの第3回目のオープンフォーラムに、師走という非常にお忙しいところ、また愛知県名古屋を中心に、北は北海道から南は鹿児島まで、遠方からお越しいただきましたことを、まず厚く御礼申し上げます。とりわけ、今回のオープンフォーラムに際しまして、お忙しい方ばかりでございますが、ご報告ならびにご講演を快くお引き受けいただき、ご準備いただきました、文部科学省国際課長木曾様をはじめ、先生方に対して心から御礼と感謝を申し上げます。また、共催ということでフォーラムの成功に力添えをいただいております愛知県国際交流協会に対しても、高いところからではございますが、御礼を申し上げます。

今回のフォーラムは、私どものセンターとしては第3回目です。第1回目は昨年3月に「発展途上国の農学分野における人づくり協力の望ましいあり方」と題し、協力ニーズの把握の仕方、あるいは人材の活用方法などをめぐって、議論し深めることができました。第2回目は昨年12月に、「国際協力プロジェクトの評価：農学分野における人づくり協力を中心として」というテーマで開催し、評価の基準、あるいは参加型評価のあり方、フィードバックの仕方等々をめぐって理解を深めることができました。そして、今回は第3回目として、「21世紀における国際協力のあり方」をテーマに、多少大上段に構えた2日間の企画となります。

ご存じのように、我が国は長期にわたる経済的苦境の中、それに伴う財政的困難がございます。それを契機にODAの見直しと申しますか、ODA予算の削減が始まるという局面を迎えています。援助のあり方について国民の中から、いろいろな意見、疑問が出ているところです。外務省レベルでは第2次ODA改革懇談会が開催され、審議されています。この懇談会の議事録等々を拝見しますと、ODAを国際社会における日本人の生き方にかかわる問題だと位置づけ、主体性・戦略性・体系性をもって、しかも比較優位を生かしながら取り組むことが重要であると、中間報告では述べています。

また、文部科学省におきましても、あとで木曾課長からご紹介いただけたと思いますが、国際教育協力懇談会が組織されまして、本格的な検討が始まっています。国際協力の世界的な流れが、人材育成、人をつくるというところに目を向け始めていることに力を得て、我が国の経験を十分に生かして国際教育協力を努めていく必要があるのではないか。しかも、それには国民参加を求めていく必要があるのではないか。議事録等を見ますと、このような提案がなされる方向で審議されているように伺われます。

このような見直しの議論を念頭におきますと、ODAのあり方をめぐっては、政府レベルではもちろんですが、産業界、教育文化界、あるいはNGO、市民レベルといったいろいろなレベルで広く国民的な議論をし、それをもとにして、我が国の国際協力が国民的理解を得ながら、世界の人々から高く評価される内容を作り出していくことが、今求められている課題だと考えられます。

今回のフォーラムは、こうした見直し論議を深めるうえで、一つの機会となるものです。同

時に、その素材としてアフリカを一つの焦点にしています。明日、その検討が中心的になされるかと思いますが、アフリカへの国際協力を見てまいりますと、我が国の場合、1980年代から90年代初頭にかけて、経済援助が中心でした。それが90年代の中頃から、貧困の解決、あるいはエイズ等を含めた感染症対策、さらには難民対策等々、大きくその内容が変わってきているかと思っています。また、アフリカ自身、自助努力を基本にして問題の解決にあたるのが重要である、ということをご共有認識しはじめております。このような局面にあつて国際協力のあり方を検討するうえでは、アフリカは非常に良い素材ではないかとセンターでは考えまして、今回のテーマとして取り上げた次第です。

私どものセンターは、現在アフリカで3つのプロジェクトに関わりを持っております。1つは、1990年に独立した国、ナミビアの大学に農学部が1つございます。その農学部の強化支援ということで関わりを持っております。2つ目には、アフリカ人づくり拠点プロジェクトです。これはケニア、タンザニア、ウガンダの3か国、8大学のコンソーシアムを形成しながら、新しいアプローチでもって、とりわけ農業、農村、食料といった分野での人づくり、さらには工業、工学、社会開発を含めた形のプロジェクトで、現在我々も関わりを持っております。3つ目に、明日報告がいただけるかと思いますが、笹川アフリカ協会、ならびにジミー・カーター・センターの共同プロジェクトとして、13カ国を対象にした農業支援プロジェクトが遂行されており、その外部評価を、私どものセンターを核として行っております。こうしたこともありまして、プロジェクトの内容をさらに高いものにするうえで、今回のフォーラムを活かせたら幸いと存じます。

当センターは、農学分野におけるさまざまな問題を、実践的な人づくりを通じて解決してまいりたいと考えています。プロジェクト開発研究、ならびに協力ネットワーク開発研究、この2つの研究を通じてその目的を達成する、ということで設けられた組織です。今日と明日の2日間、非常に限られた時間ではございますが、今は国民的な見直しの中にあるODA問題ですので、今回のフォーラムが充実した形でその見直しに貢献できることを願っております。皆様方のご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。